

コーパスに基づく日中副詞「絶対」と“绝对”の対照研究

郭 敏 (北京師範大学外国語文学学院) †

Comparison of Japanese Adverb ZETTAI and Chinese Adverb JUEDUI: A Corpus Study

Guo Min (Graduate School of Foreign Languages and Literature, Beijing Normal University)

要旨

日本語の「絶対」と中国語の“绝对”は副詞としてモダリティを表すのに重要な機能を果たしている。本稿は日中副詞「絶対」「绝对」がどのようなモダリティ表現と共起するか、どのような文類型に使用されるかを考察するものである。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」と“北京语言大学汉语语料库(BCC)”(北京語言大学漢語コーパス)を使用し、日中副詞「絶対」「绝对」の用例を採取し、共起するモダリティ表現形式について量的分析を行った。先行研究に基づき、検索されたモダリティ表現を分類し、使用される文類型と関連付け、各文類型毎における両者の使用実態と用法の異同を考察した。

1. はじめに

日中同形語である日本語の「絶対」¹と中国語の“绝对”はいずれも副詞として使用できるものの、相違点も指摘されている(張・楊(1995)、楊(2013))。本稿は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下、BCCWJと呼ぶ)と“北京语言大学汉语语料库(BCC)”(北京語言大学漢語コーパス、以下BCCと略称)を使用し、日中副詞「絶対」「绝对」に関して、共起するモダリティ表現、使用される文類型二点について調査を行い、両者の使用の実態と用法の異同を考察する。

2. 先行研究

2.1 「絶対」について

副詞の「絶対」の用法について、辞書では以下のように記述されている。

「絶対」 その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す。例:「絶対成功させたい」「絶対君が間違っている。」等。

『明鏡国語辞典第二版』(2010)大修館書店

「絶対」とモダリティとの共起関係についての研究には、佐治(1992)と坂口(1996)がある。坂口(1996)は「絶対」「必ず」「キット」等5副詞を取り上げ、働きかけ文との共起関係を考察し、副詞の語彙的意味が統語的現象に与える影響を考察した。佐治(1992)は「絶対」「キット」「必ず」「どうしても」4語の用例を作成し、13人を対象として作例の許容度を調査した。許容度の高い「絶対」の共起対象が明らかになった。

† guomin199201@163.com

¹ 以下、日本語は「」で、中国語は“”で表す。また、「絶対」は「絶対」「絶対」「ぜったい」「ぜったいに」のすべてを含む。

しかし、「絶対」と様々なモダリティ表現の共起頻度、「絶対」の使用実態などについてまだ研究する余地があると考えている。

2.2 “絶対”について

“絶対”の用法について、以下の記述がある。

[副]1.表示对事物的肯定或否定,带有较浓的主观色彩。这个人绝对老实/这东西绝对便宜/他绝对不会失约 2.表示不受任何条件的限制,带有强调的意味。多用于祈使句。这件事你绝对要保密/今天大家绝对不能离开这里 ([副詞] 1.物事に対する肯定または否定の態度を表し、やや主観的な意味合いが強い。例:この人は絶対におとなしい/これは絶対に安い/彼は絶対に約束を破らない等。2. なにもものにも制限拘束されないで、強調の意味を帯びている。“祈使句”²(広義の命令文)に多用される。例:このことは絶対内緒にしないで、今日みんなは絶対ここを離れてはいけない等)³

『現代漢語虚詞詞典』(2001) 商務印書館

これらの記述では、「絶対」及び“絶対”2語ともに話し手の気持ち、判断が表れる語となっている。しかし、具体的に共起頻度の高いモダリティ表現、多用される文の種類、両者の使用実態の異同については明らかではない。

2.3 「絶対」と“絶対”の異同について

張・楊(1995)及び楊(2013)は「絶対」と“絶対”が使用される文脈を調査した。張・楊(1995)は「中国語の“絶対”は判断文とのみ共起し、意志・命令・依頼表現などとは共起しないが、日本語の「絶対」はそのいずれとも共起する」と述べている。楊(2013)も同意見である。

しかし、張・楊(1995)、楊(2013)は作例、限られた使用例と内省とによって考察されてきたため、使用実態と若干相違がある。たとえば、BCCコーパスから以下の例が見られた(下線部は筆者による)。

- (1) “我绝对想继续唱,” 帕瓦罗蒂在意大利《新闻报》24日刊登的访谈中说。(「わたしは絶対に歌い続けたいです。」ルチアーノ・パヴァロッティはイタリアの『新聞法』のインタビューを受けた時にそういった。)

(福建日报/2006-7-26/帕瓦罗蒂出院)
- (2) “不, 乔治, 这种事情你绝对别干。”(「いや、ジョージ(人の名前)、こんなことを絶対するな。」)

(布雷登/UN/奥德利夫人的秘密)
- (3) 章仲箫(四下望了一望):“还有, 请你绝对保守秘密! 我看见了凤鸣大哥!”(章仲箫さん(周りを見て)「それから、絶対秘密を守ってください! 凤鸣さんに会ったよ!」)

(老舍/1943/谁先到了重庆)

例(1)は意志表明の文であり、例(2)は否定命令文であり、例(3)は依頼文であるが、共に“絶対”が使われている。これは張・楊(1995)の「中国語の“絶対”は意志・命令・依頼

² “祈使句”とは伝達機能から名付けられ、命令・依頼または制止の意味を表す文のことである。

³ 以下、本文中の翻訳は筆者によるものである。

表現などとは共起しない」、楊 (2013) の「命令と意志表明の文脈では中国語の“絶対”は使えない」といった主張とは齟齬がある。より多くの使用例による精査が待たれるところである。

3. 調査の概要

3.1 調査の目的

本稿では、中国語と日本語のコーパスを用いて、副詞「絶対」・“絶対”の用例を採取し、共起するモダリティ表現について量的分析を行う。次に、「絶対」・“絶対”がどの種類のモダリティと共起しやすいか、どのような文類型に使用されるかを調査し、各文類型毎に両者の使用実態と用法の異同を考察する。

3.2 データと方法

本稿で使用した日本語のデータは、国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の「出版・書籍」サブコーパスのコア・非コアデータすべてである。書き言葉のコーパスであるが、地の文と会話文のいずれも含まれており、広範囲で多様な使用場面における言葉の使用実態を調査できることが利点である。検索にはBCCWJの検索用Webインターフェースツールであるコーパス検索アプリケーション「中納言」⁴を使用し、副詞の「絶対」⁵628⁶件、「絶対に」⁷1174件、総計1802件を採取した。

一方、本稿で使用した中国語のデータは、“北京语言大学汉语语料库 (BCC)”⁸ (北京語言大学漢語コーパス、以下BCCと略称)の「総合」サブコーパスである。BCCコーパスは総計150億字が含まれ、「新聞」「文学」「マイクロブログ」「科学」「総合」「古代中国語」など数多くの分野のサブコーパスが含まれ、中国の現代社会の言語生活を反映する大規模コーパスである。BCCWJの「出版・書籍」サブコーパスが総記、哲学、文学、社会科学など様々なジャンルが含まれる。それに対応するため、BCCの「総合」サブコーパスを利用した。副詞の“絶対”⁹を63311例を採取した。

また、実際の用例の分析のために、採取された「絶対」と「絶対に」の用例から500例ずつ、“絶対”の用例から1000例をランダムサンプリングし、目視により分析することとした。

⁴ <https://chunagon.ninjal.ac.jp/login>

⁵ 検索式は次のとおりである。語彙素読み = "ゼットイ" AND 品詞 LIKE "副詞%" IN (registerName="出版・書籍" AND core="true") OR (registerName="出版・書籍" AND core="false") WITH OPTIONS unit="2" AND tglWords="20" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

⁶ 4 の検索式より採取された用例は730件であるが、そのうち名詞の用法、「絶対主義」等の漢字熟語を削除した数である。

⁷ 検索式は次のとおりである。キー: (語彙素読み = "ゼットイ" AND 品詞 LIKE "名詞%") AND 後方共起: 語彙素読み = "ニ" ON 1 WORDS FROM キー IN (registerName="出版・書籍" AND core="true") OR (registerName="出版・書籍" AND core="false") WITH OPTIONS unit="2" AND tglWords="20" AND limitToSelfSentence="0" AND endOfLine="CRLF" AND tglKugiri="|" AND encoding="UTF-8" AND tglFixVariable="2"

⁸ <http://bcc.blcu.edu.cn/>

⁹ 検索式は「絶対/d」である。「/d」によって品詞を副詞に指定する。

4. 調査結果

まず、「絶対」「絶対」と共起するモダリティ表現について量的調査を行った。その結果が、表1、表2である。紙幅の制約上、共起頻度が一番高い表現から10項目のモダリティ表現を表示した。

表1 「絶対」と共起頻度の高いモダリティ表現

「出版・書籍」サブコーパス モダリティ表現	「絶対」 (総 1000 件)	
	出現数 (件)	使用頻度
～φ (断言)	550	55.0%
する (意志)	152	15.2%
と思う	36	3.6%
てはいけない	27	2.7%
だろう	24	2.4%
なければならない	24	2.4%
はずだ	21	2.1%
たい	21	2.1%
するな (禁止)	21	2.1%
することだ	20	2.0%

表2 “絶対”と共起頻度の高いモダリティ表現

「総合」サブコーパス モダリティ表現	“絶対” (総 1000 件)	
	出現数 (件)	使用頻度
～φ (断言)	620	62.0%
不会 (はずがない)	134	13.4%
不能 (てはいけない)	73	7.3%
会 (はずだ)	46	4.6%
要 (なければならない)	27	2.7%
不可 (てはいけない)	19	1.9%
能 (だろう)	13	1.3%
不要 (てはいけない)	12	1.2%
可以 (てもいい)	12	1.2%
V (意志)	6	0.6%

表1と2からモダリティ表現形式の詳細を比較すると、「絶対」と“絶対”と共起する上位3項目のモダリティ表現形式がそれぞれ全体の75.8%、82.6%を占めており、共起するモダリティ表現に偏りがあることが明らかである。

5. 考察

本節では、検索されたモダリティ表現を分類し、「絶対」と“絶対”がどの種類のモダリティ表現と共起できるか、どのような文類型で使用されるかを考察し、「絶対」と“絶対”の用法と関連付けて考察する。

5.1 モダリティ表現との共起関係

モダリティ表現の文法研究はこれまで数多く行われているが、本稿では仁田(1991)に従って考察を進めていく。文は「言表事態」(命題)と「言表態度」(モダリティ)からなっている。モダリティは、大きく「言表事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」との二種に分かれる。「発話・伝達のモダリティ」とは、文をめぐっての発話時における話し手の発話・

伝達の態度のあり方を表す文法表現である。仁田（1991）は「文は発話・伝達のモダリティによって文に成る。発話・伝達のモダリティは文の存在様式である。従って、発話・伝達のモダリティの下位類化は、文類型の下位類化でもある」と述べている。仁田（1991）と日本語記述文法研究会編（2003）を参考に、日本語の発話・伝達のモダリティの下位分類、文類型と主な言語形式をまとめたものが、表3の日本語の部分である。さらに、王（2011）を参考に、対応する現代中国語の主な言語形式を書き加えたものが、表3の中国語の部分である。以上の項目に基づき、検索されたモダリティ表現を分類し、「絶対」と“绝对”が共起するモダリティ表現と文類型の用例数と使用頻度を表3にまとめた。

表3 モダリティ、文類型の分類と主な言語形式

モダリティ、文類型の分類と下位分類			日本語の主な言語形式	中国語の主な言語形式	絶対 (総 1000 件)	“绝对” (総 1000 件)
働きかけ (働きかけ文)	命令(命令文)	命令	命令形	必须, 得 dēi,	9 (0.9%)	5 (0.5%)
		依頼	てくれ、てください、 てちょうだい	要, 应该	21 (2.1%)	7 (0.7%)
		禁止	するな	不准, 不得 dé, 不许など	21 (2.1%)	6 (0.6%)
	誘い掛け (勧誘文)		(よ)う、ましよう	必须, 要, 应该	5 (0.5%)	0 (0%)
表出 (表出文)	意志・希望 (意志文)		する、(よ)う、つもりだ、まい、たい、	V, 想, 要, 肯, 愿意, 乐意	182 (18.2%)	9 (0.9%)
	願望		命令形	希望, 想など	0 (0%)	0 (0%)
判断のモダリティ (判断文)	真偽判断	断定	～φ	～φ	550 (55.0%)	620 (62.0%)
		推量	だろう、まい、と思う	要, 能, 会, 可能	76 (7.6%)	16 (1.6%)
		蓋然性	かもしれない、にちがいない、はずだ	能, 会, 可能	23 (2.3%)	180 (18%)
		証拠性	ようだ、らしい、(し)そうだ	無	3 (0.3%)	0 (0.0%)
	当為判断	適当	べきだ、ほうがよい	应该(应当, 应, 该, 当)得 dēi,	24 (2.4%)	8 0.8%
		必要・不	なければならない、	必须, 不得不	28	28

	必要	なくてはいけない等		(2.8%)	2.8%
	許可・不許可	てもいい、てはいけない等	能, 可, 可以, 准, 许, 不能, 不准, 不许	50 (5%)	118 (11.8%)
問いかけ (問いかけ文)		か、だろう?等	吗? 等	8 (0.8%)	3 (0.3%)

5.2「絶対」と“絶対”の使用される文類型

ここでは、調査語がどのような文で使用されるのかという点から分析することにする。図1は「絶対」及び“絶対”の各文類型における使用頻度を示したものである。

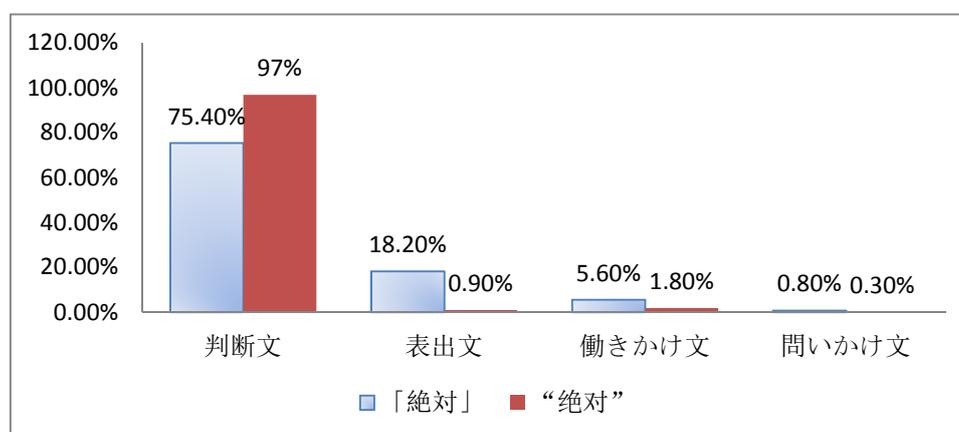


図1 「絶対」及び“絶対”の各文類型における使用頻度

図1にあるように、「絶対」が最も多く使用されるのは判断文であり、全体の75.4%を占めている。次いで、表出文が18.2%を占め、三番目に働きかけ文が5.6%であり、最後に問いかけ文が0.8%を占めている。

一方、“絶対”は判断文に最も頻繁に使われ、全体の97%を占めている。次に、わずか1.8%と0.9%がそれぞれ命令文と意志文に使用される。最後に0.3%が問いかけ文において用いられる。

以上の結果から、「絶対」と“絶対”の主な用法は判断を表すことが分かった。このことから、「絶対」と“絶対”は「その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す」という意味が基底にあり、使われる文の違いによって、判断の確信度の高いこと、意志表明の強いこと、命令態度の強いこと、勧誘態度の強いことを強調することなどの意味が伴うと考えられる。しかし、“絶対”の判断の用法は絶対多数を占め、その使用頻度の割合において極端な偏りを示している一方で、「絶対」はより分散的な意味分布が見られる。

次に、各文類型毎に「絶対」及び“絶対”の使用実態を考察する。

5.2.1 判断文における「絶対」と“絶対”

判断文において、「絶対」と“絶対”がほぼ同様な使用傾向が見られる。

判断文は大きく「真偽判断」の文と「当為判断」の文に分けられる。65.2%の「絶対」と81.6%の“絶対”は「真偽判断」の文に使用される。「真偽判断」は「絶対」と“絶対”の主な用法と言える。さらに、「真偽判断」の文が「断定」と「非断定」(推量、蓋然性判断、証拠性判断)に分けることができる。55%の「絶対」、62%の“絶対”は「断定」の文に使用されている。これは「絶対」と“絶対”の確信度が高いことを示している。

10.2%の「絶対」と15.4%の“絶対”は「当為判断」の文に使用される。さらに、「当為判断」の文が「適当」、「必要・不必要」「許可・不許可」に分かれる。そのうち、「絶対」と“絶対”いずれも「適当」より、「てはいけない」「不能」「不可」「不能」(てはいけない)のような「不許可」のモダリティ表現と「なければならない」「要」(なければならない)のような「必要」のモダリティと共に起しやすい。これも「その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気ちを表す」という意味と関わっていると考えている。

5.2.2 意志文における「絶対」と“絶対”

意志文における使用頻度において、「絶対」と“絶対”は極めて大きな差異を示している。18.2%の「絶対」は意志文に使用される一方で、わずか0.9%の“絶対”は意志文に使用される。この点に関しては、張・楊(1995)と楊(2013)の主張とは齟齬がある。

張・楊(1995)は以下の例(4)を用い、「中国語の“絶対”は意志表現とは共起しない」、楊(2013)は例(5)を使い、「意志表明の文脈では中国語の“絶対”は使えない」と論述している。

- (4) a*我绝对去。
b 私は絶対行く 張・楊(1995)
- (5) a??明天我绝对去。
b 明日絶対行く 楊(2013)

しかし、BCC コーパスから採取した例の中で、中国語の“絶対”が意志文で使用される例も見られる。

- (6) a 我追问说：“为什么我不能去？如果你不解释清楚，我绝对要去！”
(雨侠/唯我独魔)
b 「どうしてわたし行ってはだめなの。ちゃんと説明してくれないと、絶対行く！
(筆者による例(4a)の翻訳)

例(4a)及び例(5a)は非文と非常に不自然な文と指摘されている(張・楊(1995)、楊(2013))が、コーパスで例(6a)が見られる。原因を探るために、例(4a)、例(5a)と例(6a)を比較し、相違点が見られる。例(6a)で“絶対”は意志のモダリティを表す法助動詞“要”と共に起し、話し手の意志を表す。一方、例(4a)と例(5a)は意志のモダリティを表す法助動詞を伴

わず、単に意志動詞“去”（動詞の無標形式）が述語になっている。中国語のモダリティは主に法助動詞によって表現されるが、法助動詞と共起しないと意志のモダリティを表せないとは言えない。表3のとおり、“要”などの法助動詞のほかに動詞の無標形式も意志のモダリティを表せる。例えば、

- (7) 我看出蒋的用意是要我服从他，便说：“我绝对服从我们的副司令。”
 (蒋さんが私を服従させたがっているのがわかったので、「絶対副司令官に服従する。」と私は言った。)

(李敖、汪荣祖\蒋介石评传)

例(7)で、“絶対”と動詞の無標形式と共起し、意志を表明する。従って、法助動詞と共起しないのは例(4a)及び例(5a)が非文と不自然な文と見なされた原因ではない。

次に音節と語感の観点から考察する。『現代漢語虚詞用法小詞典』(1984)は“絶対”は常に双音節語と共起すると記述しているが、例(4a)及び例(5a)で“絶対”は単音節語“去”と共起する。そのために、例(4a)及び例(5a)はそれぞれ非文と非常に不自然な文と見なされたと考えている。筆者からみれば、文脈がない場合に例(4a)と例(5a)はやや不自然だが、文脈があれば自然になると考える。例(4a)及び例(5a)についての語感を調べるために、筆者が簡単な調査を行った。調査対象である中国語母語話者10人の中で、文脈がある場合に例(4a)と例(5a)が使えるという意見を持っている人が6人もいた。従って、大規模コーパスを利用し、客観的で数多くのデータを採取し分析することが非常に重要だと考える。

5.2.3 働きかけ文における「絶対」と“絶対”

5.6%の「絶対」と1.8%の“絶対”は働きかけ文に使用されている。そのうち、0.5%の「絶対」は勧誘文に使用される。それ以外すべて広義の命令文¹⁰(命令文・依頼文・禁止文)に使用される。「絶対」と“絶対”は話し手の強い気持ちを表すため、勧誘文に使用される場合相手への押しつけが強くなる。このようなポライトネス上の要素に制限され、日常会話では「絶対」と“絶対”いずれも頻繁に使われていないことが分かった。

「絶対」と“絶対”はいずれも命令文で使えるが、相違点がある。命令文において、「絶対」は命令のモダリティと共起するが、“絶対”は当為判断のモダリティと共起する。

- (8) “这到底是什么问题呢？”“对这件事你绝对要守口如瓶。我的年轻朋友。”
 (「これはいったいどんな問題か」「このことについて絶対内緒にしてください。私の若い友達。)」

(王永成/恐惧的总和)

例(8)は意味的に命令文であり、例(8)の“要”を日本語の「しなさい」に翻訳したほうが自然だが、“要”は中国語で「表出」のモダリティ、「判断」のモダリティ両分野にまたがる法助動詞である。日本語と違い、中国語には命令・依頼・禁止・勧誘の働きかけ専用のモダリ

¹⁰ 以下、広義の命令文を「命令文」と呼ぶ。

ティ表現が存在しない。そのかわりに、中国語の当為判断のモダリティは特定の条件の下で、働きかけの機能を果たす。当為判断の法助動詞は、二人称主格を取り、話し手の当為判断を表した部分を非過去形にすることによって、働きかけの表現となる。

5.2.4 問いかけ文における「絶対」と“絶対”

0.8%の「絶対」と0.3%の“絶対”は問いかけ文に使用されている。「絶対」と“絶対”の問いかけの用法は使用頻度が最も低いと言える。以下、用例を考察する。

- (9) (说话人在寻找安全住所。手下金鹏为其推荐黄石镇)“金鹏，前面就是你说的黄石镇？”
“是的。”“绝对安全吗？”“我们的人三个月来查过一次，全镇的人都是土生土长的，除了一个沙大户。”

(古龙/1975 /剑神)

(話し手が安全な場所を探そうとしている。部下の金鹏さんが「黄石鎮」を薦めた。)「金鹏さん、この前はあなたが言った黄石鎮なのか」「はい、そうです。」「絶対安全か」「3カ月前うちのメンバーが一度調べた。黄石鎮の人々は全部地元生まれ育ちの人だよ。沙大戸という人一人以外。」

- (10) 「ダッフルバッグの中にドラッグを入れてたんだ」「それは絶対に確かかな？」ポールトは訊ねた。「もしそれが空港で見た男、トラックに乗ってた男だとしたら、われわれにとってはとても重要なことで、だから確かめておきたいんだ。」

(PB29_00403)

例(9)と例(10)の問いかけ文はすべて情報要求の文である。二つの例では、「絶対」と“絶対”で問いかける前に、話し手は相手との話によって、「黄石鎮が安全かどうか」、「ダッフルバッグの中にドラッグが入っているかどうか」といった問題について既に大体判断した。しかし、それらの問題は話し手にとって非常に重要なので、確かな情報を聞こうとする。そこで、「絶対」と“絶対”を用いて、相手に最も確かな情報を要求する。これも「絶対」と“絶対”の「その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す」という意味に関わっていると考えられる。

6. まとめ

本稿では、中日同形語である「絶対」と“絶対”が共起できるモダリティ表現と使用される文類型について調査した。本稿は BCCWJ「出版・書籍」と BCC「総合」サブコーパスを使用し、日中副詞「絶対」「絶対」がどの種類のモダリティ表現と共起するか、どのような文類型で使用されるかを調査し、「絶対」と“絶対”の用法と関連付けて考察した、以下のような結論が得られた。

第一に、「絶対」と“絶対”と共起するモダリティ表現形式を比較すると、「絶対」と“絶対”と共起する上位3項目のモダリティ表現形式がそれぞれ全体の75.8%、82.6%を占めており、共起するモダリティ表現に偏りがあることが明らかである。

第二に、使用される文類型からみれば、「絶対」と“绝对”がいずれも「判断文」「表出文」「働きかけ文」「問いかけ文」に使用されている。「絶対」が最も多く使用されるのは判断文であり、全体の75%をも越えている。次いで、表出文が18.2%を占め、三番目に働きかけ文が5.6%であり、最後に問いかけ文が0.8%を占めている。“绝对”は判断文に最も頻繁に使われ、全体の97%を占めている。次に、わずか1.8%と0.9%がそれぞれ命令文と意志文に使用される。最後に、0.3%が問いかけ文において用いられる。

第三に、「絶対」と“绝对”の主な用法は判断を表すことが分かった。「絶対」と“绝对”は「その物事がどのような条件下でも必ず成立するという、話し手の強い気持ちを表す」という意味が基底にあり、使われる文の違いによって、判断の確信度の高いこと、意志表明の強いこと、命令態度の強いこと、勧誘態度の強いことを強調することなどの意味が伴うと考えられる。しかし、“绝对”の判断の用法は絶対多数を占め、その使用頻度の割合において極端な偏りを示している一方で、「絶対」はより分散的な意味分布が見られる。

本稿では、主に「絶対」と“绝对”が共起するモダリティ表現、使用される文の使用実態を考察したが、このような使用実態を引き起こす具体的な要因については次回の課題とする。

文 献

日本語関係

- 坂口和寛(1996)「副詞の語意的意味が統語的現象に与える影響—働きかけ文での共起関係を中心に—」『日本語教育』91、pp.1-12、日本語教育学会
- 佐治圭三(1992)『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 杉村泰(2009)『現代日本語における蓋然性を表すモダリティ副詞の研究』ひつじ書房
- 張麗群、楊凱榮(1995)「日本語の『絶対』と中国語の“绝对”」『教養研究』、1:3、pp.117-133、九州国際大学
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法4』
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- 『明鏡国語辞典』(2010)大修館書店
- 楊凱榮(2013)「誤用例にみる日中表現の違い—日中対照研究の現場から—」『日本語学』、32:13、pp.54-64、明治書院

中国語関係

- 刘月华、潘文娣、故韡(1983)《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社
- 张斌(2001)《现代汉语虚词词典》商务印书馆
- 王晓华(2001)现代日汉情态对比研究
- <http://www.cnki.net/KCMS/detail/detailall.aspx?filename=1012251630.nh&dbcode=CDFD&dbname=CDFDLAST2012>
- 王自强(1994)《现代汉语虚词用法小词典》上海辞书出版社
- 吕叔湘(1980)《现代汉语八百词》商务印书馆